

令和元年6月26日現在

機関番号：34315

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2016～2018

課題番号：16K16823

研究課題名(和文)日本語の補文構造

研究課題名(英文)Clausal Complementation in Japanese

研究代表者

嶋村 貢志(Shimamura, Koji)

立命館大学・スポーツ健康科学部・講師

研究者番号：00755689

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,500,000円

研究成果の概要(和文)：日本語の補文構造を意味的・統語的に研究した。具体的には引用構文を中心に考察し、(1)引用助詞「と」は補文標識ではなく付加詞的な接辞である、(2)引用文は文法化された動詞 SAY を非顕在的に介在して統語構造に導入されると主張した。(1)の結果「と」は様々な要素に付加することができるようになる。従来の生成文法の枠組みにおける日本語研究では、「と」は補文標識であり、文埋め込みしか取り扱うことができなかったが、(1)の提案により、オノマトペ+「と」から形成される副詞や名付け構文のような構造も一つの「と」の下で説明される。(2)により、日本語の引用構文の分布や副詞的な振る舞いを説明することができる。

研究成果の学術的意義や社会的意義

従来の生成文法における統語研究では、引用助詞「と」は一部の研究を除き補文標識であるとされていた。すなわち文埋め込みに関する要素であり、しばしば英語の that と同様に扱われることがあった。しかし、国語学などの日本語の記述的研究では「と」が様々な要素と出現することが示されている。また、「と」がなぜ直接引用にも間接引用にも同様に用いられるのか、なぜ日本語は命令文を埋め込むことができるのかなどが統語的にあまり説明されてこなかった。本研究では、「と」を補文標識ではなく、付加的接辞であると提案することにより、上述の「と」の性質が統一的に説明される。

研究成果の概要(英文)：This study is a syntactic and semantic scrutiny of the clausal complementation in Japanese. Specifically, it considers the quotative complementation, contending: (i) the reporting particle "to" in Japanese is not a complementizer but an adjunct particle contra the literature, and (ii) the quotative complementation involves a grammaticalized verb SAY, which is phonologically covert. Due to (i), the pertinent particle can be adjoined to various syntactic categories, which consequently derives iconic adverbs rendered by onomatopoeias with "to" as well as the naming construction. Furthermore, (ii) explains the syntactic distribution of the "to" clause and its adverbial behavior.

研究分野：言語学

キーワード：統語論 形式意味論 引用構文

様式 C-19、F-19-1、Z-19、CK-19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

生成文法理論の日本語研究では、引用助詞「と」は補文標識とされることが多く、文埋め込みのみを研究することがほとんどであった。しかし、国語学などの日本語の記述的研究では様々な用法が提示されている。例えば、「ドカンと」のようなオノマトペを用いた副詞などで「と」は現れるが、このような明らかに文を取っていない構造は研究の対象とはならず、「と」は補文標識であるという前提の基に当該要素を介する様々な統語構造の研究がなされてきた。また昨今では、Saito (2010) に端を発する補文構造の一連の研究で、補文標識の回帰構造、すなわち「のかと」の接辞連鎖において「と」は最上位の位置 ReportP の主要部を占めると主張されている。しかし、この場合でも「と」は補文標識であり、文埋め込み以外を取り扱うことはできない。このような背景で、本研究の主要な提案の一つ、「と」は付加的接辞であるという発想に至った。

2. 研究の目的

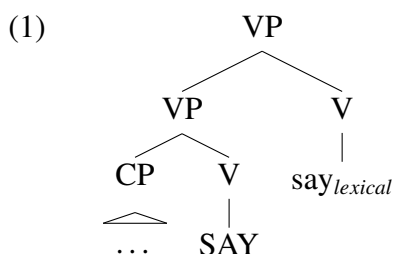
上述のように「と」を付加的接辞であると主張することにより、当該接辞を様々な要素に付加させることができる（「と」を Rep と呼ぶことにする）。例えば、「ドスンと」のようなオノマトペによる副詞は、[[ドスン]-Rep] と分析される。このような構造は統語的には Rep が「ドスン」に付加しているが意味論的には「ドスン」が Rep の項であり、Rep の形式意味論的表示は文法化された動詞 SAY の存在を動機づける。以上のような分析が正しいとするとこれまでの生成文法の日本語研究で広く扱われた「と」に関する現象も再考することになる。以上のような主張を発信することを目的とした。

3. 研究の方法

生成文法だけでなく日本語学・国語学の文献を広く読み、多くの日本語話者に日本語データの正確さを確認して研究を進めた。またこの研究は研究代表者の博士論文のトピックでもあったので、コネチカット大学の言語学科に所属していた Jonathan David Bobaljik 教授（現ハーバード大学）、Susi Wurmband 教授（現ウィーン大学）、そしてコネチカット大学の Zeljko Boskovic 教授、三重大大学の澤田治准教授に指導を仰いだ。

4. 研究成果

日本語の引用構文を分析し、その理論的・経験的帰結を日本語だけでなくその他の言語にも言及し議論した。従来補文標識として考えられてきた引用助詞「と」は付加的な接辞であり、よって様々な要素に付加できると提案した。これにより「ドスン」などのオノマトペに付加して副詞を生み出す「と」も文を埋め込む「と」も統一的に扱うことが可能になり、生成文法ではあまり議論されてこなかったデータを広くカバーすることができる。さらに日本語の引用構文は文法化された動詞「いう」(SAY) を必ず伴うと主張した。構造的に「太郎は、花子が来たと言った」などの文の動詞句は (1) のように分析される。



提案された分析において、「と」は意味的に直積（デカルト積） $\sigma \times t$ という意味タイプを生み出す。ここでは、 σ は引用された要素の任意の意味タイプ、 t はある個体が引用された語句をある個体が音的・心的に表示したという命題を表し、習慣的含意 (conventional implicature) として解釈される。この提案の結果としてそのような意味タイプを選択する要素が必要になり、これが文法化され機能的になった動詞「いう」(SAY) の存在根拠となる。というのも直積の意味タイプは SAY しか撮ることができないからである。この動詞は 顕在的あるいは非顕在的に「と」が使われる環境では必ず存在することになるが、これは通言語的に支持され、様々な経験的帰結を導き出した。例えば、「太郎はこんにちとはと部屋に入ってきた」のような文の「こんにちとはと」は副詞であるが、これは SAY を非顕在的に介することにより派生される。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計3件)

- (1) Akimoto, Takayuki and Koji Shimamura. 2017. Syntactic Analysis of Alleged Locative Alternating Compounds. *The Proceedings of Seoul International Conference on Generative Grammar* 19: 39-51(査読あり)
- (2) Shintaro, Hayashi, Hisao Kurokami, Satoshi Ito, Koji Shimamura and Ayaka Sugawara. 2016. Indexical Shifting in Kansai Japanese and Nominalization under Wh-agreement *Proceedings of Formal Approach to Japanese Linguistics* 8: 31-42, MITWPL (査読あり)
- (3) Shimamura, Koji. 2016. On the Internal and External Syntax and Semantics of Report in Japanese *The Proceedings of Seoul International Conference on Generative Grammar* 18: 535-554 (査読あり)

〔学会発表〕(計6件)

- (1) Akimoto, Takayuki and Koji Shimamura. 2017. Only in Syntax: Syntactic Derivation of Lexical Compounds in Japanese
日本言語学会 155 回大会
- (2) Akimoto, Takayuki and Koji Shimamura. 2017. Syntactic Analysis of Alleged Locative Alternating Compounds
Seoul International Conference on Generative Grammar 19
- (3) Shimamura, Koji. 2017. Introducing Quote in Japanese and Its Crosslinguistic Relevance
日本言語学会 154 回大会
- (4) Shimamura, Koji. 2017. The Fiction of CP Recursion: On the Nature of Complementizers in Japanese
招待発表 人文科学研究所公開研究会 中央大学
- (5) Shimamura, Koji. 2017. On the Internal and External Syntax and Semantics of Report in Japanese
Seoul International Conference on Generative Grammar 18 (2016)
- (6) Shimamura, Koji, Shintaro Hayashi and Hideharu Tanaka. 2016. Diagnosing Movement in Japanese: In Terms of Three (Controversial) Cases
関西言語学会 41 回大会 ワークショップ共同開催者

〔図書〕（計 1 件）

- (1) Susi Wurmbrand and Koji Shimamura. 2017. *The Verbal Domain*. Oxford: Oxford University Press （担当箇所 The Features of the Voice Domain: Actives, Passives, and Restructuring, pp. 179-204）

〔その他〕（計 1 件）

- (1) Shimamura, Koji. 2018. The Theory of Quotative Complementation in Japanese Semanticsyntax. Doctoral dissertation. University of Connecticut, Storrs, CT.
<https://opencommons.uconn.edu/dissertations/2023/>

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。